

虚子記念文学館投句特選句

・令和三年十一月

稲畑汀子 選

虚子館へ道のり軽ろし小春かな

大阪 友井正明

白無垢の染まりさうなる紅葉晴

兵庫 金田八江子

切干の大鉢どんとたき上がる

兵庫 山田佳乃

赤々と鶏頭くらき花壇かな

兵庫 キートスばんじょうし

風韻の椽の落葉や庭明かり

兵庫 岩水ひとみ

茶の花の蕊に押されてひらきけり

神奈川 進藤剛至

城濠は水の回廊紅葉燃ゆ

兵庫 中井陽子

一年の思ひ秘めたる冬紅葉

兵庫 福間笙子

皺の手の爪繰る数珠や報恩講

兵庫 武田奈々

(青少年)

業平橋行き交ふ人の息白し

兵庫 阿曾宏之

入選句・令和三年十一月

立冬の大きな晴れを賜はりし	京都	山崎貴子	かわい子紅葉狩りで真赤だな	兵庫	曾野波波
小春日の光の館で読む一書	兵庫	奥田好子	六甲山眠りて街へ枯れ日差し	京都	杉森大介
師の恙無きこと祈る今朝の冬	京都	西村やすし	風吹きて枯れ葉流るる芦屋川	兵庫	義平哲哉
鳥群れてをりし日向や冬に入る	鳥取	椋 則子	そと広ぐ立子の初集秋の雛	愛知	小野 薫
橡落葉あしとられつつ庭歩く	兵庫	辻田あづき	虚子館は心のまほら神の留守	大阪	石橋玲子
立冬の日矢燦燦と記念樹に	兵庫	玉手のり子	穏やかな栢落葉踏む苑生かな	兵庫	細田清子
こだはりの結びをほどき酢茎かな	兵庫	中村恵美	俳磚の万首を照らす櫨紅葉	兵庫	田中節夫
山茶花や朝に掃いては夕に掃き	兵庫	池田雅かず	御来迎银杏木の葉の舞ひやまず	大阪	田邊育子
紅葉散る木霊の言葉ひとつづつ	兵庫	涌羅由美	芦屋へと水面彩添ふ冬紅葉	奈良	芳林淳子
絨緞に乗りて飛びたき小春日の日	兵庫	伊藤政枝	小春日は猫といるだけ日曜日	兵庫	道中義一
芦屋浜風立てば冬近しとも	大阪	林 曜子	枯蓮や生ききる命閑かなり	兵庫	伊藤秀子
虚子館の扉を押して冬に入る	鳥取	前田 千	ペダル踏む枯葉そのままかごに	兵庫	山崎渺美
灯は蠟燭のみや報恩講	徳島	奥村 里	背を丸め祈る姉妹や神渡し	神奈川	平野孤舟
神の旅のごとくに虚子に集ひたる	岡山	石井宏幸	バスを待つ遅れて秋も今通過	兵庫	足立朱麻
立て砂の少し崩れて神渡	大阪	西尾浩子	松風に空流れをり冬うらら	兵庫	三浦花梨
男衆の磨く仏具や親鸞忌	兵庫	武田優子	芦屋川今が盛りの冬紅葉	兵庫	野村笑楽
海光を乗せ立冬の列車過ぐ	兵庫	多田羅紀子	色褪せた遊具並びて冬めける	兵庫	瀬戸 橙
水門の跡金木犀の風抜くる	大阪	山田 天	ふうわつと外套なびく漫歩なり	京都	古賀摘陽
夕日濃くなりし背山や薄紅葉	兵庫	永沢達明	冬晴を貫く松のうねりかな	兵庫	井上歩々里
雑炊を卓に戦争語る祖母	兵庫	入谷千恵子	さつぱりとした山茶花の赤き花	石川	辰巳昌彦
海眩し芒の眩し芦屋川	石川	辰巳葉流	冬の海蹴立て出漁大和堆	石川	伊東弥太郎
夜参りの心に灯る帰り花	兵庫	槌橋眞美	月明に火花となりぬ花八手	兵庫	高市敦之
色鳥の色を隠せる日差かな	兵庫	吉村玲子	芦屋川松青くして水の涸る	東京	宮村土々
華やかに咲き虚子館のほととぎす	兵庫	高杉靖子	日の名残り仄と編みこむ棉飾り	兵庫	田村恵津子
虚子館の句会満席今朝の冬	兵庫	藤井啓子	家居して寒禽の声ほしいまま	兵庫	金子三奈乃
炊き立てを待てず酢茎の爪楊枝	兵庫	塚本武州	縁側の母の背まろし小春哉	神奈川	
虚子館で学ぶ朝の冬の虹	兵庫	長安悦子			
猪威し川向うから聞こえ来し	兵庫	小川孝子			